

# 『通俗忠義水滸伝』をめぐる諸問題

中 村 綾

## はじめに

近世に日本で初めて翻訳された『水滸伝』の翻訳集『通俗忠義水滸伝』（以下通俗）は非常に複雑な成立をしており、底本や翻訳者の問題など、未だ不明な点が多い。それは、当初百回本の翻訳を計画し、初・中・下編に分けて正編が刊行されてきたものが、第九十五回までの翻訳が下編として既に刊行された後に、百二十回本の増補箇所を拾遺の形で挿入し刊行されたためである。出版書肆も下編以降は版元が入れ替わるようになり、以下の通りとなる。

初編 卷一～十五（百回本の第三十一回末まで）

宝暦七年九月

書林 植村藤右衛門／吉田四郎右衛門／林九兵衛／林権兵衛

中編 卷十六～三十（第三十二回より第六十七回末まで）

安永元年十二月

書林 初編に同じ

下編 卷三十一～四十四（第六十八回より第九十五回末まで）

天明四年正月

書林 林権兵衛／横江岩之助／山田屋卯兵衛／武村嘉兵衛

拾遺 拾遺卷一～卷十の後に卷四十五、四十六、四十七

（百二十回本の二十回分と百回本の残り五回分）

寛政二年十月

書林 林権兵衛／横江岩之助／武村嘉兵衛／武村甚兵衛

また、翻訳者に関しても、正編にはその見返しに岡嶋冠山の名が記されるが、

拾遺編では最初の口禀で以下のように述べられており、田虎・王慶討伐の二伝は「丟屯道人」に依頼した、という旨が記される。

〈通俗拾遺口禀〉

…先年岡嶋先生ノ訳スル所今世上ニ發賣イタシ候フ通俗水滸傳ハモト百回ノ本ニ拠ツテ訳セシ本ナレハ田虎王慶ノ二段ヲ缺リ余輩是ヲ恨トナスコト久シ今幸ニ丟屯道人ニ乞フテ田虎王慶ノ二傳ヲ通俗シ是ヲ水滸拾遺ト名ク乞願ハクハ世間ノ看官勞煩ヲ厭イ玉ハズ此本ヲ今迄世ニ行ハル、通俗水滸傳第四十二卷メノ宋江五臺山ニ參禪スト云所ト燕青双林渡ニ雁ヲイルト云ル処ノ間ニ挟ンテ見玉ヘバ自ラ全傳ヲ見ニ等シカラン且此二傳ヲ燕青ガ夢トナセシハ作者ノ意ニシテ某等ノ知処ニ侍ラズ

于時天明戊申孟冬

これまでの先行研究では、次のように、従来石崎又造氏が、正編の翻訳は冠山が手掛けたが、拾遺編に組み込まれた最後の五回分は冠山ではなく「丟屯道人」の手になるものである、との見解を示していたが、白木直也氏が、通俗に翻訳者は全編に渡って冠山ではなく、「丟屯道人」である、との見解を打ち出し、今日では、通俗の翻訳者として冠山は否定的に考えられている。そして、近年、高島俊男氏は、全編とも冠山の訳ではないであろう、と述べつつも、「丟屯道人」は、おそらく底本をめぐって出版書肆が揉めた後に担ぎ出されてたのであろう、と述べられている。

〈先行研究〉

石崎又造氏

正編は冠山、拾遺（増補分十巻とその続きである巻四十五から四十七）が「丟屯道人」の訳。（『水滸伝の異本と其の国訳本』（白木直也氏下記論文の引用より）

白木直也氏

『通俗忠義水滸伝』は正編も拾遺も「丟屯道人」の手になるものであろう。

(「通俗忠義水滸傳の編譯者は誰か」)

高島俊男氏

全編とも冠山の訳ではないであろうと述べつつも、「丟屯道人」は、おそらく底本をめぐって出版書肆が揉めた後に担ぎ出されたのであろう。(『水滸伝と日本人』)

翻訳者に関しては、正編の翻訳に冠山が関与しており、冠山の生前から翻訳が完成していた可能性がある、ということは、平成十八年度日本近世文学会秋季大会（以下日本近世文学会）で発表したのであるが、本発表では、拾遺の翻訳態度が以下の四つの観点から、正編とは異なるため、拾遺になって「丟屯道人」なる者が翻訳に担ぎ出されたのであろうことを検討し、そして、その上で正編の方が冠山の手法が色濃く反映されていることを確認したい。

まず、本論に入る前に『水滸伝』のテキストについて説明しておきたい。『水滸伝』諸本は以下の様に分類することが出来る。

『水滸伝』諸本

〈古い百回本〉容與堂本 四知館本

〈新しい百回本〉芥子園本 無窮会本 和刻本（無窮会本と同じ祖本を持つ関係）

これらに田虎・王慶討伐を入れたのが百二十回本、後に七十回で話を終わらせたのが金聖歎本である。

『水滸伝』の一番古い形態は全百回の百回本である。その中でも、〈古い百回本〉とした容與堂本、四知館本が水滸伝の古いテキストである。そして、この百回の話に、田虎・王慶討伐を盛り込んだのが百二十回本であり、本発表の拾遺編に関わってくる箇所となる。

また、古くは白木直也氏により、古い百回本から百二十回本が作られ、今度はその百二十回本から増補箇所を削って、芥子園本、無窮会本、和刻本などの新しい百回本が作られた、と見なされていたが、近年、笠井直美氏の様々な版

本の校勘調査の結果により、新しい百回本は、百二十回本ができる前に成立していた可能性が指摘された。そして、後に、金聖歎という人物によって、英雄が梁山泊に集う第七十回で話を終わらせる金聖歎本が編纂される。

『水滸伝』の版本問題は、未だ論議が絶えないが、日本では、近世に百二十回本こそが水滸伝の最高のテキストである、と見なされ尊ばれた一方で、通説では宝暦頃より金聖歎本が流行し流布したとされている。『通俗忠義水滸伝』は、その近世の人々の価値観を反映した翻訳集と言えるが、当初百回本で翻訳が進められた通俗が、拾遺編の中にどのように百二十回本、金聖歎本を取り込んでいったのか、という観点から、以下に正編との違いを述べていきたい。

### 一 詩詞韻文の翻訳態度

講釈に起源を持つ中国白話小説では、情景描写などを詩や詞（以下詩詞韻文）で描く、という特徴がある。『水滸伝』もまた、いずれのテキストでもこの詩詞韻文の形態が随所に見られるのであるが、この箇所は通俗での訳され方は、正編では、詩詞韻文箇所は適宜省略しながら地の文の中に一部を訳出する、というのが基本方針であった。

また、『水滸伝』原文には詩詞韻文以外にも、仏教の偈文、法語、また、書簡文などや古い民謡の歌詞なども多々引用されるのであるが、これらは同様に削除されるか、またはそのまま原文を引用してきた。そのまま引用された形を取るものは、翻訳者が翻訳の過程でその原文の内容が必要である、と見なしたものと考えられ、正編中、そのまま漢文の形で引用された箇所はすべて『水滸伝』原文にその文言を探することができるものであった。

しかし、拾遺になると、原文には見られない詩が随所に登場するようになる。その例が、以下の様なものである。

【A】

百二十回本	通俗拾遺
<p>〈第九十五回〉            …只見宋陣中一個先生驟馬出陣、仗口松紋古定劍、口中念念有詞喝聲道疾、猛見半空裏有許多黃裱神將向北去、把那黑氣衝滅。            喬道清喫了一驚、手足無措、宋軍見…</p>	<p>…宋ノ陣中ヨリタチマチ一人ノ先生馬ヨリ出シ手ニ松紋ノ古定劍ヲトリ口中ニ怨念シテ一声ノ疾トサケバ忽チ空中ニ黃裱神ヲ現ンジテ手ニ降魔ノ利劍ヲタツサヘ北ニ、向ツテ彼黑雲ヲ滅シケリ            強中更有強中手            莫向人間逞我威            此トキ喬道清ハ大ニ驚ロキミルトコロニ宋ノ軍中ヨリ…</p>
<p>〈第七回〉            …知我這箇八卦陣變為八八六十四、即是武侯八陣圖法、便可破他六花陣了。盧俊義出到陳前喝道…</p>	<p>…我コノ八卦ノ陣ノ變ジテ八々六十四トナストキニハ即チ武侯ノ八陣トナルコトヲシラズ我是ハ八陣ヲモツテ向フトキハ彼ガ六花ノ陣ヲ破ランコト疑イナカルベシト語レバ盧俊義モ大ニ朱武ガ高見ニ伏ス            業已比諸葛 名堪稱神機            布陣各有法 誰不仰軍威            サレバ此トキ盧俊義ハ馬ヲハナツテ陳前ニイデ大ニ呼ハツテ云ク…</p>

【B】

百二十回本	通俗拾遺
<p>〈第九回〉            …管領馬步兵三千、伏于兩脅那座陳排布得十分整密、正是            軍師多略師恢弘 士湧貔貅馬跨龍            指揮要建平西績 叱咤思成蕩冠功            那箇草頭天子王慶同李助在陣中將臺上定睛看了宋江兵馬、…</p>	<p>…各ク三千ノ歩兵ヲ領ジ陳勢十分ニソナハレリ正ニコレ            八陣已就鬼難測 天地再生管葛才            此トキ草頭天子王慶ハ李助ト同ジク宋軍ヲノゾムニ…</p>

これらはいずれも、『水滸伝』原文には見られない詩が導入されている例であり、〈A〉は、原文には韻文が全くない箇所に詩が創作されているパターン、〈B〉は、原文にも詩はあるが、その詩の文言が全く違うというパターンである。このような翻訳箇所は、〈A〉〈B〉両パターンとも他にもあり、いずれも正編では見られなかった翻訳方法である。この点からまず、正編と拾遺とでは、翻訳者は異なるのではないか、と推測できるかと思われる。

そして、詩詞韻文の翻訳態度、という観点から更に推察を深めると、冠山が通俗の翻訳に関与している可能性を考えた時、詩詞韻文箇所の削除という正編の傾向は、冠山の他の作品とも共通するのである。

『皇明英烈伝』の訳解『通俗皇明英烈伝』では、全二十巻にわたって導入詩や途中の情景描写の詩詞韻文は削除され、時折、書簡文などのみ原文が引用されてきた。また、『太平記演義』では、白話文では冠山自らが「看官聴説」（見る人、お聞き下さい）など、聞き手を意識した講釈独特の文体で書いておきながら、その訳では、講釈の特徴は一切排除されてきた。これらの冠山の技法は、通俗の正編の翻訳方針と共通するものと思われる。

いずれにしても、正編と拾遺とでは詩詞韻文の翻訳態度が異なるため翻訳者の異なることが推察でき、更に正編の方が拾遺よりも技法は冠山に近いのではないか、ということが考えられるのである。

## 二 翻訳の重複

次に、下編から拾遺を差し挟んで読む際に一部翻訳が重複している箇所があり、その翻訳文は異なるものである、という点から考察を進めたい。

通俗は、下編で既に第九十五回まで翻訳が進んだ後に、増補箇所を挿入して拾遺が刊行されたため、下編の途中からは、書肆の指示に従いややこしい順序で読まなければならない。順序を示すと次のようになる。

〈通俗の下編、拾遺を読む順序〉

通俗下編卷四十二【五臺山宋江參禪】



通俗拾遺を巻一より巻十まで読む。



通俗下編巻四十二 【双林渡燕青射鴈】

(以下百回本第九回の内容に沿った訳が展開されていく)



通俗下編巻四十二【双林渡燕青射鴈】から巻四十四まで読み終えた後、拾遺編の中の巻四十五から巻四十七を読む。

このように、正編の下編は巻四十四までであるが、巻四十二【五臺山宋江參禪】まで読んだ後、拾遺編巻一から十までの増補箇所を読み、それを読み終えると、また正編に戻り、巻四十二の途中【双林渡燕青射鴈】から読み、正編を巻四十四まで読み終えると、拾遺編の中に組み込まれた、巻四十五から四十七を読まなければならないのである。この読む順序を踏まえた上で、増補箇所を読み終えた後、拾遺編からいったん正編の【双林渡燕青射鴈】に移る部分に着目して詳しく見ていきたい。

『水滸伝』百二十回本のテキストでは、第百十回で燕青が雁を射るエピソード以降、百回本との文言の異同はあるが、従来百回本にあった内容を展開していくことになる。ところが通俗でこの箇所を読むと、拾遺巻十でこのくだりを読み、正編巻四十二に戻ってこの続きを読むのであるが、その際に正編に戻ると、拾遺編の最後の方で読んだ翻訳をもう一度読むことになるのである。これは、拾遺編では増補箇所の翻訳が終了してもその先まで翻訳が進んでいるため、従来百回本の翻訳として刊行されていた正編に戻ると、拾遺編の最後の方で読んだ訳をまた読むことになるためである。とはいっても、その重複箇所はややこしいため、以下にそれを示す。

〈百二十回本第百十回〉

梁山泊水軍、王慶方の水軍を破る。(百九回からの続き)

↓ (本来増補箇所はここで終了だが、拾遺の翻訳はまだ続くので、こ

こから翻訳が重複。)

### 宋江等東京を望んで出発

○途中、秋林渡という所で燕青が雁を射る。(拾遺では省略。資料2波線部)

宋江等、都へ帰り着き、軍を陳橋駅に留めて朝廷の命を待つ。宋江等、聖恩を拝受。

↓

●王慶を処刑。王慶さらし首にされる。(百回本にはないエピソード)

宋江等、聖恩を拝受した後帰ると、

↓

○公孫勝が別れを告げて去って行く。(拾遺では省略。資料2波線部)

元旦、拝賀に参内するが、宋江と盧俊義しか官職が与えられず、李逵が梁山泊に帰ろうと言いだし、宋江に叱られ、

↓ (ここまで重複)

皆に笑われる。(通俗拾遺では以降を金聖歎本を踏んだ結末に独自に展開。)

このように、○印の燕青と公孫勝の話は省略され、重複箇所は太字で示した箇所となる。具体的な重複の例は後に挙げていくが、重複の理由としては、重複の前半は●印の王慶を処刑しさらし首にする、という百二十回本独自の内容が、挿入箇所が終了した後に組み込まれているため、それを訳出するためにその少し前から訳が必要であった、後半の重複は、通俗拾遺巻十の結末を、百二十回本にはない、金聖歎本のパロディ化という独自のものにするため、その前段階として訳が必要であった、と考えられる。

次に、翻訳が重複している箇所を具体的に示すと以下の通りになる。



容與堂本第九十回	通俗下編卷四十二
<p>…智真長老並衆僧都送出山門外作別。不説長老衆僧回寺。且説宋江等衆將下到五臺山下、引起軍馬、星火<sup>?</sup>來。衆將回到軍前、盧俊義、公孫勝等接着宋江衆將、都相見了。… (中略) …望東京進發。(百二十回本挿入部) 在路行了數日、五軍前進到一箇去處、地名雙林渡。宋江在馬上正行之間、仰觀天上、見空中數行塞鴈、不依次序、高低亂飛、都有驚鳴之意。… (中略) …不則一日、回到京師、屯駐軍馬於陳橋驛、聽候聖旨。且説先是宿太尉並趙樞密中軍人馬入城、宿太尉、趙樞密將宋江等功勞奏聞天子…</p>	<p>…智真長老自ラ諸僧ヲ引テ。山門ノ邊マデ。送り玉フ。宋江等長老ヲ謝シテ。五臺山ヲ離レ。直ニ盧俊義ヲ慕テ。急ギケリ</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">(拾遺十卷分を先に読む)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">(下編卷四十二) 【双林渡燕青射鴈】</p> <p>及時雨宗公明ハ。諸將ト共ニ。一千餘ノ兵ヲ引テ。盧俊義ガ跡ヲ慕テ。急ギケル程ニ。早ヤ軍前ニ至リケレバ。盧俊義。公孫勝自ラ出テ。宗江等ヲ。迎ヘケル。… (中略) …宋江三軍ヲ催促シテ進發ス。有ル日双林渡ト云フ處ニ至テ。宗江天ヲ仰ギ看ルニ。數行ノ寒鴈次序ヲ乱シテ。紛紛ト空ヲ飛ビ。都テ驚クノ模様アリ。… (中略) …既ニシテ數日ヲ過シケル處ニ。早ヤ東京ニ至リ。軍馬ヲ陳橋驛ニ屯シテ。勅命ヲ降ルヲゾ待ニケル。擬宿太尉趙樞密ハ。中軍ノ人馬ヲ引テ。東京城ニ入り。宗江等ガ勲功アルコトヲ。天子ニ奏聞シ。…</p>
<p style="text-align: center;">↓</p> <p>…宋江與衆將謝恩已罷、盡出宮禁、都到西華門外、上馬回營。一行衆將、出的城來、直至行營安歇、聽候朝廷委用。次日只見公孫勝直至行營中軍帳內、與宋江等衆人打了稽首、便稟宋江道、… (中略) …次日衆皆相別。公孫勝穿上麻鞋、背了包裹打箇稽首望北登程去了。宋江連日思憶、淚如雨下、鬱々不樂。有詩為證、</p> <p style="padding-left: 2em;">數年相與建奇功 幹運玄機妙莫窮 一旦浩然思舊隱 飄然長往入山中</p> <p>時下又值正旦節相近、諸官準備朝賀。…</p>	<p style="text-align: center;">↓</p> <p>…宗江等諸大将コレヲ悦ブコト。限りナシ。次ノ日公孫勝。宗江ガ當中ニ至テ恭シク申シケルハ。… (中略) …此日即チ酒宴ヲ設ケテ。公孫勝ヲ邀ヘ。諸ノ豪傑ト共ニ別レヲ惜ミ。一盤ノ金銀ヲ饒ニ送りケル。公孫勝コレヲ謝シテ。終日酒ヲ酌ミ。翌日未明ニ。旅粧束ヲ調ヘ。宗江等諸英雄ヲ辞シテ。當中ヲ出ケレバ。宗江自ラ打送りテ。互ニ泪ヲ洒ギ。永キ別ヲ。嘆キケリ。此時正月モ早ヤ近クマリシカバ。蔡太師ヲ首トシテ。諸ノ官人ドモ。都テ朝賀ノ用意ヲ調ヘリ。</p>
<p style="text-align: center;">↓</p> <p>…黑旋風李逵道、哥哥好沒尋思。當初在梁山泊裏、不受一箇の氣、卻今日也要招安、</p>	<p style="text-align: center;">↓</p> <p>…黑旋風李逵進ミ出テ。云ケルハ。宗君何ゾ此ノ如ク。愚ナルヤ昔日我輩梁山泊ニ在</p>

明日也要招安、討得招安了、卻惹煩惱。放着兄弟們都在這裏、再上梁山泊去、卻不快活。宋江大喝道、這黑禽獸、又來無禮。如今做了國家臣子、都是朝廷良臣。你這廝不省得道理、反心尚兀自未除。李逵又應道、哥哥不聽我說、明朝有的氣受哩。衆人都笑。…

(以下第九十回の内容が展開されていく)

リシ時ハ。上ニ一人ノ主。アラズシテ。天ヲ怕レズ。樂自ラ多カリツルニ。今日モ御赦免。明日モ御赦免トテ只御赦免ノミ願ヒ玉ヒ。今却テ憂ヒヲ惹出シ。諸人都テ。鬱悶ニ逼ルコト。皆自ラナス所ナリ。若再ビ此ヲ去テ。梁山泊ニ回ラバ。大ヒニ樂ラン。宗江罵テ曰。汝禽獸又來テ。無礼ヲ云フヤ。我們今國家ノ臣トナリ何ノ面目カ。コレニ過ンヤ。然ルニ汝。又梁山泊ニ回ラントハ。天命ヲ知ラザル。愚人ナリ。重ネテ此ノ如キコトヲ云バ。我決シテ免スマジ。李逵打嘆テ曰。宗君若我言ヲ。用ヒ玉ハズンハ。後日必ズ。奸臣等ガ。毒氣ヲ受テ。悔ヒ玉フコト。多カラシ。諸將コレヲ聞テ。一笑ヲ催シケリ。…

(以下内容與堂本第九十回の内容に沿った訳が展開されていく)

資料 2

<p>百二十回本第百十回</p> <p>【燕青秋林渡射鴈 宋江東京城獻俘】</p> <p>…見今兵馬其十由餘萬離了南豐、取路望東京來。軍有紀律、所過地方秋毫無犯、百姓香花燈燭價拜送。于路行了數日、到一箇去處地名秋林渡、那秋林渡在宛州屬下內鄉縣秋林山之南、那山泉石佳麗。宋江在馬上遙看由景、仰觀天上、見空中數行塞鴈、不依次序、高低亂飛、都有驚鳴之意。…(中略)</p> <p>…不則一日、回到京師、屯駐軍馬於陳橋驛聽候聖旨。且說先是陳安撫並侯參謀中軍人馬入城、已將宋江等功勞奏聞天子、…(中略)…有詩為證</p> <p>去時三十六 回來十八隻 縱 千萬里 談笑卻還鄉</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>…宋江與衆將謝恩已罷、盡出宮禁、都到西</p>	<p>通俗拾遺卷十</p> <p>【宋江剿寇成功】</p> <p>去バ宋江ハ十余万ノ人馬ヲシタガヘテ東京ヲノゾンデ進發シスグル所ノ地方ヲ少シモ侵スコトナケレバ百姓大ニヨロコンデ老ヲタスケ幼ヲタツサヘ香ヲタキ燭ヲテラシテ相ムカウ</p> <p style="text-align: center;">(燕青の話省略)</p> <p>去バ日ヲヘテ十余万ノ軍兵ハヤク東京城ニ着シケレバ例ニマカセテ軍馬ヲトメテ陳橋驛ニタムロシ聖旨ノクダラヲ相伺フ是ヨリサキニ陳安撫並ニ侯蒙羅毅カ兵馬ハスデニ城中ニイツテ三人ヲノク參内シスナハチ天子ニ奏シケルハ宋江ヲ諸將百タビ戦フテ百タビ勝チ…(中略)…</p> <p>去時三十六 回來十八隻 縱 千萬里 談笑返帝邦</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>…此トキ宋江ハ諸將ト共ニ恩ヲ謝シテ文徳</p>
--	--

華門外、上馬回營。一行衆將、出的城來直至行營、安歇聽候朝廷委用。當日法司奉旨會官寫了犯由牌打開囚車、取出王慶判了副字、擁列市曹、…看的人都道、

此是惡人榜樣 到底駢首戕身

若非犯着十惡 如何受此極刑

當下監斬官將王慶處決了當、梟首施行、不在話下。再說宋江衆人受恩回營、次日只見公孫勝直至行營中軍帳內、與宋江等衆人、打了稽首、便裏宋江道、…（中略）…次日衆皆相別。公孫勝穿上麻鞋、背了包裹打箇稽首望北登程去了。宋江連日思憶、淚如雨下、鬱鬱不樂。時下又值正旦節相近、諸官準備朝賀。…

↓

…黑旋風李逵道、哥哥好沒尋思、當初在梁山泊裏、不受一箇的氣、卻今日也要招安明日也要招安、討得招安了卻惹煩惱。放着兄弟們都在這裏、再上梁山泊去、卻不快活。宋江大喝道、這黑禽獸、又來無禮。如今做了國家臣子都是朝廷良臣、你這廝不省得道理、反心尚兀自未除。李逵又應道、哥哥不聽我說、明朝有的氣受哩。衆人都笑。…

（以下百十回の内容が展開されていく）

殿ヲ辞シ西華門ヨリイデ營中ニカヘリケリ  
此日法司ハスデニ天子ノ勅ヲウケ賊主王慶  
ヲ牢中ヨリ引イダシ東京城中城外ヲ引ワタ  
シケレバ…看人山ノ如クスベテ云フ

此是惡人榜樣 到底駢首戕身

若非犯着十惡 如何受此極刑

（公孫勝の話省略）

去ホドニ宋江ヲ衆人ハ已ニ陳橋駅ノ旅館ニ  
カヘリ各々太平ヲ賀シニケリ去バ冬モ已ニ  
スキテ元旦ノ節近ケレバ宋江ハ諸將ニ命ジ  
テ朝賀ヲナス用意ヲナサシメケリ…

↓

黒旋風李逵跳リイデ、大ニサケンデ云ク  
兄長甚ダ主意ナシ我ラハジメ梁山泊ニアリ  
シトキハ誰カー一人ノ機嫌ヲトルモノナカリ  
シニ今日モ招安アリ又明日モ招安アリトテ  
夜モ昼モ招安ヲマチ玉ウガ今スデニ招安ア  
リトテ此ノゴトクノ愁ヲヒキダセリ如ズフ  
タ、ビ梁山泊ニノボリ快クタクノシミタマヘ  
我ハカノ朝廷ノ烏官人ヲ切ベシト已ニ斧ヲ  
サケテ立ケレバ宋江大ニ叱シテ云ク此畜生  
ナンゾ道理ヲシラザルヤ你スデニ朝廷ノ臣  
トナリ忠義ヲツクスベキ処ニカヘツテ反逆  
ノ心ヲナスヤト李逵イカンゾキ、イレン忽  
チ虎ニゴトクニ吼ヘ板斧ヲヒツサゲ營外ニ  
走リイブレハ諸將コレヲ止ムル間モナク已  
ニ行ヘラウシナヘリ…（中略）…李逵モ元  
ヨリ大強力ノモノナレト燕青音ニキコエ  
相撲ノ達人ナレバ只李逵ヲツマツカサシト  
力ヲツクシテ秘手ヲナスニ忽チハタト響キ  
シテ眠リノ夢ハサメニケリ…（中略）…此  
処ハ又イブレノ処ナルコトヲシラズ頭ヲア  
ライデ上面ヲミルニ一面ノ牌額アリツラ  
〜見レバ金字ニテ天下太平ノ四ツノ文字

ヲ書セリコレ双林城中ナルカタシカナルコ  
トラシラズ

後人詩アリ云ク

太平天子當中坐 潰憤官員四海分

但見肥羊寧父老 不聞嘶馬動將軍

叨承禮樂為家世 欲以謳歌寄快文

不學東南无諱日 卻吟西北有浮雲

又詩ニ云ク

大抵為人土一丘 百年若箇得齋頭

完祖安穩貴於帝 負曝奇温勝惹喪

子建高才号繡虎 莊生放達以為牛

夜寒薄醉揺柔幹 語不驚人死不休

通俗忠義水滸伝拾遺卷十六尾

初卷ニモ口稟ヲ以テ申アゲ候フトウリ此ヨ  
リ燕青双林渡ニ鴈ヲ射ルトイヘル回ヲ御ヨ  
ミナサレ四十七卷ノ大尾ニイタル迄展覧ナ  
サレ候ハゞ水滸伝ノ大意詳シク分リ申候フ  
以上

※「宋江」が「宗江」になっている箇所は、ここに挙げた例の初出箇所のみ「ママ」を施した。

このように、通俗では拾遺から正編卷四十二に戻ってまた同じ箇所の翻訳を読むことになり、ここに示したように、網掛けした箇所が重複していることになる。そして、正編と拾遺とで重複箇所を照らし合わせると、その翻訳文は異なるものであることが分かる。

また、重複箇所の翻訳文が異なるものであるだけでなく、使用底本もそれぞれ異なっていることが、資料1の傍線部「宿太尉並趙樞密」及び資料2の傍線部「陳安撫並侯參謀」から判明する。この二つは、その前後から対応箇所であることが分かるが、資料1の容與堂本やその他の百回本の類と、資料2の百二十回本とでは人物に差があり、翻訳文もそれぞれ上段に従っている。使用底本の問題は以下第四章で述べたいが、このように、正編と拾遺とでは翻訳箇所が一部重複し、その翻訳文が異なる点、また、使用底本もそれぞれ異なっているという点を確認しておきたい。

### 三 金聖歎本の使用

第二章では、正編と拾遺とで翻訳が重複している箇所を見てきたわけであるが、資料2に挙げた重複箇所終了後の末尾に詠まれた後人の詩とも関連する金聖歎本の使用、という面から拾遺の特質を述べたい。

通俗拾遺卷十の結末を金聖歎本のパロディ化で締めくくっている、ということとは第二章で少し述べたが、金聖歎本のパロディ化が始まるのは、資料2の重複箇所が終了した直後の「李逵イカンゾキ、イレン忽チ虎ノゴトクニ吼へ…」からである。怒って走り出した李逵を燕青が相撲の技で負かし、そして燕青は眠りから醒め、すべては夢であったことを知る、上には「天下太平」の四字が書かれており、最後は後人の詩で締めくくられる、というこの結末は、百二十回本にはない拾遺独自の展開である。

しかし、この結末を迎えるために、拾遺編では巻一導入部で既に次のようなエピソードをわざわざ設けてあるのである。

#### 『通俗忠義水滸伝』拾遺編卷一

##### 双林鎮燕青遇故

去程ニ梁山泊ノ宋江等百八人ハ已ニ宋ノ天子徽宗皇帝ノ招安ヲ被ムリ尽ク天子ノ臣トナリ宿太尉趙樞密ト同ジク大軍ヲ領シテ大遼ヲ攻テ遂ニ是ヲ降参セシメ兵ヲ五隊ニ分ツテ東京ヲサシテ凱陳ス…(中略)…宋江ハマヅ衆將ト同ジク城中ニ入り盧俊義ニ對シテ彼五臺山ニテ衆人トモニ参禪シテ誓ヲ設ケ又智真長老ニ偈ヲ授リシコトヲ委シク語レバ衆人奇特ノ思ヲナセリ去バ此トキ三軍ノ諸將ヲ久シク征戰ノ勞ニツカレケレハ暫ク兵馬ヲ城中ニ屯ロシ各ク養生ヲサナシメテ一兩日ヲ過ケルニ折シモ冬至ノ節ニアイケレバ宋江ハ各ク無事ナルヲ賀シ又一陽來復ノ佳節ニアフコトヲ悦ビテ即チ双林城中ニオイテ大ニ太平宴ヲモウケシメ宋江盧俊義ヲ始メトシテ百八人ノ英雄ナラビニ三軍ノ兵卒ニ至ルマデ酒ヲ酌テ太平ヲ賀セシメケル此日衆將ミナ皆大ニ酔ケレバ宋江再ビ香ヲ燒キ衆人ニ對シテ云ク某片言アリ兄弟ヲ是ヲ聽聞セラルベシ

只今各々朝廷ノ臣ナレバ昔ノ比ニアラズ況ンヤ皆天星地曜ノ精ナレバ各々  
異心ナク患難アイ祐ケテ忠義ヲツクシ樂ハ必ず樂ヲ同フシ憂ハ必ず憂ヲ同フ  
シ只生ル、時ヲ同シフセズトイヘトモ願クハ同日同刻ニ死セン若不仁ニシテ  
忠義ヲ忘レ始アツテ終ナキ者ハ共ニ神明ノ冥罰ヲカウムリ永ク地獄ニ陥テ万  
世マデモ人ニ生ル、コトナシト誓イ終レバ衆人モ同声ニ發願シ只願クハ  
生々相會シ世々相會セントテ再ビ血ヲ軟リ酒ヲ飲デ大ニ酔イ各々帳中ニ入  
テ休ミケリ此夜浪子燕青ハ帳中ニアツテ夢ニ似テ夢ニアラズ忽チ一个ノ処ニ  
至ル山秀デ水明ラカニシテ甚ダ風景ヨキ地ナレバ傍リノ人ニ其地ヲトウニ即  
チ双林鎮ナリト答フレバ燕青心中ニ思ヘラク我頃日ハ城内ニアツテ此等ノ風  
景ヨキ地アルコトヲシラズ暫ク遊行シテ慰シモ苦シカルマジトテ足ニ任セテ  
二三里ノ路ヲ行ケルニ忽チ後ヘニ馬ノ嘶ク声シケレバ燕青頭ヲフリムイテ是  
ヲ見ニ一人ノ大漢カシラニ青紗巾ヲ載キ身ニ皂布ノ道服ヲ着シ馬ニ乗ジテ出  
キタルニ是庸碯<sup>ナミナミ</sup>ノ人トハ見ヘザレバ燕青立トゞマツテ熟ク伺フニ少シノ  
面善<sup>ミシリ</sup>アルニ似レバ探頭探腦<sup>タメツスガメツ</sup>コレヲ見ニ彼人近ク来ツテ呼デ云ク賢弟ハ是燕青  
ニアラズヤト燕青ガ云ク扱ハ是許貫忠兄ナルカト此トキ許貫忠馬ヨリ下ツテ  
共ニ礼ヲナシ久滴<sup>ヒサシアリ</sup>ノ情ヲ述ケル処ヘ宋江ガ大軍已ニ至リ…

拾遺編に入るとすぐ、宋江たちは双林鎮という所にやって来る。その後、宋江たちは双林城中で太平の宴を催すのであるが、夜になって燕青は夢うつつに帳に入り、夢の中で双林鎮という所にいることを知る、という展開から拾遺編は始まる。しかし、引用文の中の傍線部を施した箇所は、従来の百二十回本文の増補箇所にはないくだけで、原作では増補箇所に入るとすぐ、宋江達が許貫忠と出会うことになる。つまり拾遺では、導入部より既に燕青が夢うつつに帳に入る設定になっており、最後に燕青が夢であったことを知る結末を迎えるのである。そして、最初に挙げたように拾遺編口裏には、「且此二傳ヲ燕青ガ夢トナセシハ作者ノ意ニシテ某等ノ知処ニ侍ラズ」とことわり書きがされているのである。

この二伝を燕青の夢とした作者とは誰のことであるのかは不明確であるが、百二十回本にはない、拾遺編の卷一導入部及び卷十の結末は、次に示すように金聖歎本第七十回最後の展開を踏襲したものであることは明らかであろう。

〈金聖歎本第七十回末尾〉

是夜盧俊義歸臥帳中、便得一夢。…（中略）…盧俊義夢中嚇得魂不附體、微微閃開眼、看堂上時、却有一箇牌額、大書、天下太平、四箇青字。詩曰

太平天子當中坐 瀆憤官員四海分  
但見肥羊寧父老 不聞嘶馬動將軍  
叨承禮樂為家世 欲以謳歌寄快文  
不學東南无諱日 卻吟西北有浮雲  
大抵為人土一丘 百年若箇得齋頭  
完祖安穩貴於帝 負曝奇温勝惹喪  
子建高才号繡虎 莊生放達以為牛  
夜寒薄醉揺柔幹 語不驚人死不休

金聖歎本では、前述のように梁山泊に英雄が集う第七十回でストーリーが終了するのであるが、最後は金聖歎本オリジナルの展開となり、百八人の好漢が皆処刑されるがそれは盧俊義の夢であった、という結末と後人の詩で締めくくられる構想になっている。それを拾遺では、そのまま燕青の夢であったという様に構想を借りているのである。拾遺口裏には、「天明戊申」と記されていることから、この燕青の夢であるという構想は翻訳に着手した天明年間当初からあったものと考えることができ、拾遺編では最初から最後まで金聖歎本を意識して翻訳が進められた、と推測できると思われる。

一方正編では、初編の巻頭に勾曲外史の雍正甲寅の年の序と梁山泊英雄の七人の図という金聖歎本にしか見られない序が付けられているものの、内容面は古い百回本の訳であり、金聖歎本を使用した痕跡は見受けられない、というこ

とは日本近世文学会で発表した内容であるが、通説では宝暦頃より流行し始めた、と言われる金聖歎本が、正に宝暦年間に初編の刊行を迎えた正編では体裁面でしか利用されていないのに対し、拾遺編では、内容面にまで金聖歎本を使用しているのである。

このことは、正編の翻訳は金聖歎本が流布する大分以前に完成していたのに対し、拾遺編の翻訳は金聖歎本が既に流布している状況下で進められた、と想定することができ、この点からも正編と拾遺とでは翻訳者が異なることが考えられるかと思われる。

#### 四 使用底本の問題

最後に正編と拾遺の使用底本について確認しておきたい。

『通俗忠義水滸伝』正編の大方は、容興堂本や四知館本の系統に属する古い百回本に依拠していることは日本近世文学会の方で発表したことであるが、通俗の拾遺編には、増補箇所の後、更に卷四十五から四十七までに、『水滸伝』の残り五回分の訳が記載されている。第九十回の増補箇所を過ぎても、正編の中では使用底本は古い百回本で第九十五回まで翻訳が進められているのであるが、拾遺編では、底本に百二十回本が使用されていることが次の例から確認できる。

##### 【百二十回本】 第一百回

宋江再拜奏道、托聖上洪福齊天、臣等衆將雖有金傷、俱各無事。今元兇授首淮西平定、實陛下威德所致、臣等何勞之有。再拜稱謝奏道、臣等奉旨、將王慶獻俘闕下、候旨定奪、天下降旨、着法司會官、將王慶凌遲處決。宋江將蕭嘉穗用奇計克復城池、保全生靈、有功不伐、超然高舉。天子稱獎道、皆卿等忠誠感動、令省院官訪取蕭嘉穗赴京擢用。宋江叩頭稱謝。那些省院官、那箇肯替朝廷出力訪問賢良、此是後話。是日天子特命省院等官計議封爵、太師蔡京、樞密童貫商議奏道…（中略）…宋江與衆將謝恩已罷、盡出宮禁都到西華



門外上馬回營。一行衆將出的城來、直至行營、安歇聽候朝廷委用。當日法司奉旨會官寫了犯由牌、打開囚車、取出王慶判了副字、擁到市曹。看的人厭肩疊背、也有吨罵的、也有嗟歎的。那王慶的父王碧及前妻丈人等諸親眷屬、已於王慶初反時收捕誅夷殆盡、今日只有王慶一箇簇擁在刀劍林中。兩聲破鼓响、一棒碎鑼鳴、鎗刀排白雪、皂纛展烏雲、劊子手叫起惡殺都來。恰好午時三刻、將王慶押到十字路頭讀罷犯由、如法凌遲處死。看的人都道、

此是惡人榜樣 到底駢首戕身  
若非犯着十惡 如何受此極刑

當下監斬官將王慶處決了當、梟首施行、不在話下。再說宋江衆人受恩回營、次日只見公孫勝直至行營中軍帳內、…

【容興堂本】 【四知館本】 第九十回

宋江再拜奏曰、托聖上洪福齊天、邊庭寧息。臣等衆將雖有金傷、俱各無事。今已沙塞投降、實陛下仁育之賜、再拜稱謝。天子特命省院等官計議封爵、太師蔡京、樞密童貫商議奏道…（中略）…宋江與衆將謝恩已罷、盡出宮禁都到西華門外上馬回營。一行衆將出的城來、直至行營、安歇聽候朝廷委用。次日只見公孫勝直至行營中軍帳內、…

【無窮會本】 【芥子園本】 第九十回

宋江再拜奏道、托聖上洪福齊天、臣等衆將雖有金傷、俱各無事。今逆虜投降、邊庭寧息。實陛下威德所致、臣等何勞之有、再拜稱謝。天子特命省院等官計議封爵、太師蔡京、樞密童貫商議奏道…（中略）…宋江與衆將謝恩已罷、盡出宮禁都到西華門外上馬回營。一行衆將出的城來、直至行營、安歇聽候朝廷委用。次日只見公孫勝直至行營中軍帳內、…

【通俗】 拾遺編卷十

宋江再拜シテ奏シテ云ク今主上ノ洪福天ニヒトシク某ラ諸將傷者アリトイヘドモ今各ク无事ニシテ准西ヲ平ラゲ賊首ヲトリコニスルコト實ニ主上ノ威德ノイタス処ナリ全ク臣ラノ力ニアラズ今賊首王慶スデニ是ヲ闕下ニ捉ヘヲケリ只勅命ヲマツテ是ヲ刑ニ行ンコトヲ欲ス此トキ天子法司ニシテシテ王慶

ヲ動シメシコトヲ勅シタマヘバ宋江再<sup>ママ</sup>び蕭嘉惠ガ計ヲ以テ城ヲウバウテ百姓  
ヲ安ンジ功アレドモ誇ラズ超然トシテ逃レサリシコトヲ委シク奏聞スレバ天  
子大ニ称美シタマイ即チ省院官ニ命ジ蕭嘉惠ガユクヘヲ尋ネシメ京ニ迎ヘテ  
重ク官爵ニ封ゼンコトヲ勅シタマヘバ宋江叩頭シテ恩ヲ謝ス此トキ天子ハ  
大<sup>ママ</sup>師蔡京樞密童貫ヲト議シテ… (中略) …此トキ宋江ハ諸將ト共ニ恩ヲ謝シ  
テ文德殿ヲ辞シ西華門ヨリイデ營中ニカヘリケリ此日法司ハスデニ天子ノ勅  
ヲウケ賊主王慶ヲ牢ヨリ引イダシ東京城中城外ヲ引ワタシケレバ此トキ見フ  
ツ人山ノ如ク<sup>ヲシヤイヘシヤイ</sup>厭肩疊背アルイハ罵リアルイハ嗟シヌ彼王慶ノ父王晝ヲヨヒ前  
妻牛氏舅牛大戸ヲハ王慶ガ反叛セシハジメニ已ニ誅ゼラレヌ□□今日王慶只  
一人法場ニ引イダサレ刀劍ヲヌキテ白雪ノコトク四方ヲ取カコミ午時ニイタ  
ツテ羅ヲナラシ犯由牌ヲ讀オワリ遂ニ重キ刑罰ニオコナワレ又此トキ人切役  
ハスデニ王慶ガ首ヲ<sup>コクモン</sup>梟枷ニスサレバ看人山ノ如クスベテ云フ

此是悪人榜様 到底駢首戕身

若非犯着十惡 如何受此極刑

去ホドニ宋江ヲ衆人ハ已ニ陳橋駅ノ旅館ニカヘリ各ク太平ヲ賀シニケリ去バ  
冬モ已ニスキテ元旦ノ節近ケレバ…

ここに載せた百二十回本の内容は、田虎・王慶討伐を果たした百二十回本にのみ見られる、王慶のさらし首を大衆が見物するエピソードで、第三章でも翻訳の重複箇所として挙げたが、百二十回本にしか見られないくだりである。この箇所の文言を他のテキストと比べると、他の百回本では、容興堂本、四知館本、無窮会本、芥子園本いずれも王慶の話がないため、非常に簡潔である。通俗拾遺ではこの箇所の翻訳が百二十回本にのみ見られる内容できちんと翻訳されている。

また、次に挙げる二例からは、使用底本が百二十回本であると限定はできないが、百二十回本、無窮会本、芥子園本などのテキストと一致してくるため、上記の王慶の例と合わせて考えると、拾遺編は百二十回本を用いて翻訳が進め

られた、と考えることができるかと思われる。

①【百二十回本】第百十六回

先鋒使宋江帶領正偏將佐三十六員攻取睦州並烏龍嶺

略

水軍頭領正偏將佐七員部領船隻隨軍征進睦州

略

副先鋒盧俊義管領正偏將佐二十八員取歙州並昱嶺関

軍師朱武	林冲	呼延灼	史進	楊雄
石秀	單廷珪	魏定國	孫立	黃信
歐鵬	杜遷	陳達	楊春	李忠
薛永	鄒淵	李立	李雲	<u>鄒潤</u>
湯隆	石勇	時遷	丁得孫	孫新
顧大嫂	張青	孫二娘		

【無窮会】【芥子園】第九十六回 百二十回本に同じ

【容興堂】第九十六回

先鋒使宋江帶領正偏將佐三十六員攻取睦州並烏龍嶺

略

水軍頭領正偏將佐七員部領船隻隨軍征進睦州

略

副先鋒盧俊義管領正偏將佐二十八員取歙州並昱嶺関

軍師朱武	林冲	呼延灼	史進	楊雄
石秀	單廷珪	魏定國	孫立	黃信
歐鵬	杜遷	陳達	楊春	李忠
薛永	鄒淵	<u>鄒潤</u>	李立	李雲
湯隆	石勇	時遷	丁得孫	孫新
顧大嫂	張青	孫二娘		

【四知館】第九十六回

先鋒使宋江帶領正偏將佐三十六員攻取睦州並烏龍嶺

略

水軍頭領正偏將佐七員部領船隻隨軍征進睦州

略

副先鋒盧俊義管領正偏將佐二十八員收取歙州並昱嶺關

軍師朱武	林冲	呼延灼	史進	楊雄
石秀	單廷珪	魏定國	孫立	黃信
歐鵬	杜遷	陳達	楊春	李忠
薛永	鄒淵	<u>鄒潤</u>	李立	李雲
湯隆	孫新	顧大嫂	張青	孫二娘

【通俗】拾遺編卷四十五

先ツ睦州ノ方ヘハ先鋒使宋公明ヲ初トシテ。其付屬諸將ニハ

略

又水軍ノ頭領ニハ

略

猛將都テ。三十七人其勢都合三万余ト聞エシ。先ツ烏龍嶺ヲ奪フテ。睦州ヲ。攻破ントス又歙州ヘ向フ。軍勢ニハ副先鋒。盧俊義ヲ始トシテ其ノ付屬。諸將ニハ

軍師朱武	林冲	呼延灼	史進	楊雄
石秀	單廷珪	魏定國	孫立	黃信
歐鵬	杜遷	陳達	楊春	李忠
薛永	鄒淵	李立	李雲	<u>鄒潤</u>
湯隆	<u>石勇</u>	<u>時遷</u>	<u>丁得孫</u>	孫新
顧大嫂	張青	孫二娘		

※人名の順番が通俗は百二十回本、無窮会本、芥子園本と一致する。

②【百二十回本】第百十九回

宋江看那一張字紙時、上面寫道是

辱弟燕青百拜懇告

先鋒主將麾下、自蒙収録多感厚恩、效死幹功、補報難蓋、今自思命薄身微、不堪國家任用、情願退居山野、為一間人、本待拜辭、恐主將義氣深重、不肯輕放、連夜潛去、今留口號四句拜辭、望乞主師恕罪

鴈序分飛自可驚      納還官詰不求榮

身邊自有君王赦      洒脫風塵過此生

【無窮会】 【芥子園】 第九十九回 百二十回本に同じ

【容與堂】 【四知館】 第九十九回

宋江看那一張字紙時、上面寫道是

辱弟燕青百拜懇告

先鋒主將麾下、自蒙収録多感厚恩、效死幹功、補報難蓋、今自思命薄身微、不堪國家任用、情願退居山野、為一間人、本待拜辭、恐主將義氣深重、不肯輕放、連夜潛去、今留口號四句拜辭、望乞主師恕罪

情願自將官詰納      不求富貴不求榮

身邊自有君王赦      淡飯黃齏過此生

【通俗】 拾遺編卷四十六

宋江彼字紙ヲ開キ見ニ。上ニ寫シ云

辱弟燕青百拜懇告

先鋒主將麾下、自蒙収録多感厚恩、效死幹功、補報難蓋、今自思命薄身微、不堪國家任用、情願退居山野、為一間人、本待拜辭、恐主將義氣深重、不肯輕放、連夜潛去、今留口號四句拜辭、望乞主師恕罪

鴈序分飛自可驚      納還官詰不求榮

身邊自有君王赦      洒脫風塵過此生

※詠まれた韻文の文言が通俗は百二十回本、無窮会本、芥子園本と一致する。

この二例を王慶の例と照らし合わせて考えると、拾遺編に組み込まれた増補箇所並びに残り五回分は百二十回本の翻訳と思われ、このことから、古い百回本をベースに翻訳が進められたと思われる正編とは異なるため翻訳者も異なる

るのではないかと考えられる。

### おわりに

これまで述べた四つの観点から、拾遺編は正編とは異なることを指摘することができ、翻訳者も正編と拾遺編とは異なるのではないかと推測される。そのため、白木氏が指摘されたように全編が同一人物である「丟屯道人」によってなされたものであるとは考えがたいように思われるのである。

そして、更に考察を深めると、翻訳文に使用された白話語彙や詩詞韻文の翻訳態度などの面において正編の方が冠山の技法の特徴がよく顕れていること、通俗は体裁面では一貫して金聖歎本を意識しながら、内容面では、正編に金聖歎本を使用することは不可能であった事情が窺えること、などの理由から、正編の翻訳には冠山が関与しており、翻訳が完成していたのは冠山の生前であった可能性が考えられるのである。白木氏以降、通俗への冠山関与はずっと否定的に考えられてきたが、本発表での考察から、少なくとも通俗が全編通して同一人物である「丟屯道人」の訳である、とは考えられず、また、異なる人物によって翻訳されたのであれば、正編には様々な点から冠山らしい痕跡が残されているように思われるため、古くは石崎又造氏が考えられていたように、正編は冠山、拾遺は「丟屯道人」が関与した翻訳ではないかと考察されるのである。

#### \* 討議要旨

大高洋司氏は通俗本の訳者を冠山とすると、冠山没年から『通俗忠義水滸伝』初篇の刊行までの時間的隔たり、及び正篇の完結にかかった年数などの問題がでてくるが、それについてどのように考えているかと尋ね、発表者は、宝永二年の『通俗皇明英烈伝』の序文に、冠山に英烈水滸の二伝の訳解を依頼した旨が記されていることから、その当時すでに計画があったこと、及び、通俗本の白話語彙に冠山に独特なものが多いこと、また陶山南濤の言に問題があるため、和刻本と通俗本との態度の違いは問題にならないことなどを挙げて冠山関与の可能性について述べた。

中嶋隆氏は浅井了意との関係の場合、林義端の序文に疑わしい点があるのだが、この『通俗皇明英烈伝』の序文の信頼性はどうか、と尋ね、発表者は義端の序文を疑ったことはなかったが、書肆との関係という観点から、陶山南濤の『忠義水滸伝解』の書肆は冠山とは関わりがなく、南濤の発言の方をまず疑って考えてきた結果、冠山関与の可能性にたどり着いた旨を回答した。